

宗教問答



020718-000-1

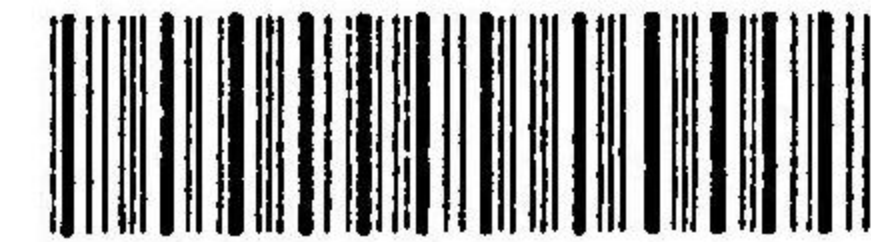
325-141

宗教問答

サー・オリバー・ロッチ/著

M44

ABI-0538



325
141

サー、オリバー・ロツヂ原著
文學士 尖倉保譯

宗 教 問 答

東 京 普 光 社

Earth and 
 **Heaven.**

BY
Sir. Oliver Lodge.

TRANSLATED BY
K. T. Shishikura, M.A.


THE FUKOSHA

1 Ogawamachi, Kanda,

TOKYO.

1911

序文

問答の最も適宜にして最も便利なる形式は是を式語の中に簡叙するにあり。何となれば生徒をして式語を記しむるは彼等をして教師の思想と同化せしむるに助なればなり。但し先づ會話によりて自然に其問題の點出し徐るに答の意義全部を生徒の心頭に湧き出でしめ、その答には詳細なる説明と充分なる註解を加へざるべからず。さばれ意義深長にして充實せる語の意義を悟らしめ其興味を傳ふるは如何に説明し如何に暗誦せしむるも少年の頭腦に注入するを得ざることあるべし。而も信條の文字は精確なる用語と嚴格なる構造を要



す。かくて吾人は生徒をして積極的錯誤に陥らしめむより不完全なる理解に満足せむことを勗めたり。本書問世に至るまでの或者は生徒をして是を暗誦せしめなば益あるべし。そは宗教の根本原理を陳へたるものなれば如何なる宗派の信仰にも抵觸せざるものなり固より用語の點に至りては宗派によりて或は異なる所あるべきも原理は本書所載のものご一如なり。

第廿一間以下に於て吾人は一層難解にして意義深遠なる術語に對し普遍的に認容せられある定義を掲げたり是れ一方に於ては熱誠眞摯なる宗教家の個人的實驗に堅牢なる根柢を與へ一方に於ては諸説の紛々たる枝葉

問題に拘するがために其根本の閑却せらるるを防がむためなり。是種大問題の細目に亘りて究明せむご欲すれば基督教徒内部の間に於ても異説百出して何處に統一を發見すべきかに苦む。

元より大問題には難解の點あり。難解の點に於て諸家劃一の説を持つることは稀なり。されば信仰の根柢未だ定まらざる青年の頭腦に如何なる程度迄是くの如き諍論を注入すべきかは問題なり。蓋し青年時に注入せられたる誤りの思想は後年是を矯正するの殆んど不可能なればなり。但し或青年は是種の問題に驚くべき理解ご趣味を有するが故に父母教師は生徒の能量に應じ

て斟酌する所あるべし。
 由來眞理は是を人的見地より見ば必須的に多様なり。
 然るに餘りに一宗派の教義を偏重する者は往々這個の
 消息を閑却し其結果眞理の美と調和とに想到せざるは
 可嘆也。加之言辭寛濶にして細目に亘らざる程眞理は
 精確を期し得らるべし。されば實踐上の効果ある包含
 的信條は決して委曲事を律せざるなり。信條を普遍的
 ならしめむと欲すれば宜しく簡單にして活ける眞髓を
 執ふべし。外皮幾層の裡に核子を藏するとあれど生命
 の無限なる可能性を有するは中心にある最小部分のみ
 是微々たる核心はやがて生氣潑漑たる萌芽なるなり。

宗教問答

地と天と

答は何れも説明術義を必要とす。父母教師のため簡單なる註解を
 附したれど猶充分を望むものは^{「オプス・カサス・オプ・ラ・エ・メ」}信仰の本質及び^{「ライフ・エッセンス・オブ・ソウ」}生命と物質を参照
 すべきし。
 問一 汝は如何なるものなりや。

答、我は活ける靈なり。肉に縁りては地に連り、精神に縁りては神
 に連る。

註、肉體及び感官に縁りて吾等は物質界に接觸するを得。肉體に

縁りて吾等は他を助け他に知らる。されば地に附ける生命は人と人との交情を開く機縁なり。而して靈は宇宙の高邁なる境地に游泳し其靈體は天の微分子より成る。されば地に附ける肉體の解體するとき靈に別様の形體を與へらるるは有り得べきことなり。

問二、人の外に如何なる物ありや。

答、空、陸、海に種々なる生物充盈てり。生物は己がまにまに處るべき場所を選びて生息す。加之地球は無數なる世界の一に外ならず。吾等夜大空を仰ぐときに見ゆる諸星は其一部に過ぎず。是くの如き宇宙は人の造れるものに非ず又人の司配し得るものに非ず。

註、上文全體の意義は宇宙が無際限にして其中の生物も亦人の考へ得ざる程夥多しく且多種なれば地球の住民を以て最高存在者と見るは根本的に不合理なりとのことなり。故に存在界の範圍は無

限なりとの思想を暗示す。

問三、人と下等動物との主なる區別は如何。

答、人は前後を顧み自ら自己を教育して品性と運命とを作り得。

註、換言すれば人は自意識と自制力とを有し正邪を識別取捨す。されば偶發的慾望の翻弄物とならずして意志及び品性を作り得るものなり。誘惑に打勝たるゝ場合にも猶自ら墮落せりとの自意識を伴ふ。人は自己の行爲並びに外界を支配する權能あり。(テニソフ Profundis) 多數の人に於ける亂發的衝動は自ら矯正し抑制せざるべからずと雖も徳操の至境に達したるものにおいては衝動そのものに明察を伴ひ服従そのものに歡喜を湛ふ。(ウオーツウオースの義務の諸歌並びに「永生中の眼目たる部分を暗誦せしむべし」)

問四、汝の主なる義務は何ぞ。

答、潔白にして正直、人を助け職務を勵み忠信を守り慈愛を篤くし自己と他人とを尊び、神の法則を學習びて是れに服従することなり。

註、上掲の文字は單に表面の意義をのみ取るべからず。又如何なる社會の階級にも適用するを得べし。潔白とは肉體のことも精神のことも含む。正直は詐欺をせざることに限らず。慈愛は人の道德の一切を含む。法則とは實踐生活に關係ある自然法のみならず。家庭、社會、凡べて他に對する道德をも含む。

問五、罪とは何ぞ。

答、罪とは我が不善と思ふ所を爲すことなり。罪は紛争と殃福を生ず。残忍、虚偽、怠慢は罪の果なり。嫉妬、怨恨、貪婪も然り。罪の原因は主として私慾にあり。罪に勝つは愛と祈禱を以て神の幫

助を求むるにあり。

註、ラスキンは一千八百七十一年其著胡麻と百合の序文に於て残忍と怠慢とが如何に意外に大なる範圍を占め居るかを説きぬ。嫉妬は少年の陥り易き過失なり。貪婪とは分以上の財寶を收斂せむとすることにして、社會の福祉を毒する賊蟲なり。

備考、哲學上の所謂罪惡とは吾人の日常經驗する罪と異れど茲には論せず(問廿五を見よ)。

問六、インスピレーションとは如何なるものぞ。

答、インスピレーションとは靈の感化にして、天才と稱せらるる感性の特別に強き人に自己の力以上のことを知り又は爲す力を與ふ。是力は平凡なる者を利用して高遠き目的を遂ぐる利器とならしむ。

註、大藝術家又は大音樂家の利用する材料は最も平凡なる種類に

屬す。是を利用し深遠なる情緒を彰はし以て人生を富贍ならしむるが如きは眞にインスピレーションの適例なり。詩人や豫言者が最も高邁なる思想を披瀝しつゝあるとき彼等は自己以上の能力に感化せられつゝありと自覺するものなり。如何なる場合にも或程度迄相互關係を必要とす。天才の名作もインスピレーションを受けたる金箇玉條も是を領會し得る力なきものには無意義なり。

問七、汝は神を如何なるものと思ふや。

答、神とは智、善、愛の靈、無始、無終、萬物を創造り萬物を擁護り、萬物に義と愛とを與へ給ふ無上在存者の尊號なり。我等の生命も能力も凡べて神のものなれば我等は一切を捧げて神に仕ふべき義務あり。

註、神に仕ふる義務と人に仕ふる義務とは互に相關聯す。心を専らにし神に仕ふるはやがて人を益する所以なれどまた人に益せむがため東奔西走するは神の喜悅に入る道なり。神を愛すると兄弟を愛するとは本來別事に非ず。(太廿五)一は他の結果なり發現なり。

問八、何故人は神の像に創造られたりと曰はるゝや。

答、人は小さき者なれど想像する力と支配する力を有し、且つ他に向ひて慈仁と愛とを施し得るが故なり。

註、是答は神の像の意義を言ひ盡くしたるものに非ず。されば少年には年齢に應じて一般卑近なる例を取りて説明し神と人との類似を教ゆべし。(太四五〇)

人に創造の力あるは種々の美術品を例として説明し得べし。想像力にして有功若くは創造的ならしむる爲には知識と理解との健全

を必要とす。建築家又は音楽家の想像又は夢は實際物質中に實現せらる。神が自己の意匠を實現するため諸勢力を利用し給ふ方法は是に縁りて説明し得べし。

問九、如何にして我等は神の性を知り得るか。

答、自然界に縁り人性の高等き方面に縁り又た自己の經驗を詩人哲學者豫言者の力を籍りて説明するに縁り殊にイエスキリストの生涯と教訓とを學ぶに縁りて是を知る。イエスキリストはキリストの父にしてわれ等の父、キリストの神にしてわれ等の神を人々に顯はさむがために人となりて是世に來り是世に住まひ給へり。

註、太陽の光輝(○來三)は太陽そのものに非ずして人が太陽を地上より見たる相なり。而して人のためにはそれにて足れり。その如くイエスキリストも永劫のキリスト若くはロゴス(○約一)の人のために

受肉せるものなり。如何なる存在者の内包若くは含蓄の全部も時間空間上に於ける物質的形體に縁りて發現し盡くさるゝと能はず。是言は或意味に於て一切生物否な無生物にも適用せられ得べし。人類に於て更らに然り。而してキリストに於て最も然り。

神は自然界及び人類の歴史に内住すると共に超越す。宇宙は時間的關係を有し空間中に擴がる。宇宙は存在せむとしつゝあるものなり。神は存在者なり。神は「我れ有り」と名けらるゝ者なり。

問十、我等はキリストを如何に考ふべきか。

答、キリストは人の子の理想にして又神の子の理想なり。イエスは全備き神の靈を全備き人の形體にて顯はし、人の神性と神の人性とを我等に示し給へる者なり。

註、意は人性中に潜勢力として神性の因素あり。神性中に圓滿具

足せる人性の因素あるを曰ふ。救世主の使命を解せむとせば完備せる人性即ち人類と一様なる性を領會せざるべからず。キリストが完全なる神の驚くべき性を吾等に顯はし得たるは彼れが完全なる人となりしに縁れり。(約十七〇六) 基督教の神觀は宇宙の争闘以外に超然たる一存在者の如き神に非ず。無窮無限の可能性を有し自由にして自意識あり且つ自動的なる諸存在者を進化的に創造し教育し産の助力と苦闘とを避け給はざる神なり。

問十一、聖靈の感化は如何に考ふべきか、

答、そは我等の内に宿る神位なり。我等喜びて是を傾け納れ、心して是を保たばそは我等の思を高め動機を淨め意志を樂くし我等を永久に指導きて高きに登らしむ。

問十二、祈禱とは如何なるものなりや。

答、祈禱とは神と交通り聖靈の幫助を求むる人の努力なり。人は惱める時天の父を召び、誘惑と戦ふ時に上よりの力を求め、事業を企つるとき神の幫助を希ふを得。凡そ自己及び他人のために計ることにして何等の危害を醸さずば神に祈ることを妨げず。されど今も永久も現世にて祈禱るべきことは神の旨を知り且つ是を行はむことを最上とす。

註、意志に縁りて物質とエネルギーとを支配する能力は疑もなく宇宙の中に實在す。全然法則に従ひて活動せざるべからざる人類にすら是能力あるは吾人の日常見聞する所なり。加ふるに人類には同情と友の幫助とあり。而して人の有する特長を神は有せずと曰はゞ是れ大なる不條理なり。然らば神が人の祈願に對して應答を與へ給ふともそは決して宇宙の秩序を侵害するものに非ず。吾

人は又祈禱の應驗の顯然たらざることありとも相當の祈願をなさずして止むべきにあらず。應驗ありしかなかりしか吾人は眞に是れが判断をなす能はず。小兒の如き服従と信頼と安心とを以て祈禱するは最上の態度なり。されば祈禱する時は熱誠を籠め心血を凝らしてすべし。

問十三、主の禱を暗誦せよ。

答、天に在ます我らの父よ。願くば聖名を聖となさしめ給へ。聖國を臨らしめ給へ。聖旨を天に於る如く、地にも行はしめ給へ。我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。我らに罪を犯すものを我ら赦す如く我らの罪をも赦し給へ。我らを試に過せず悪より拯ひ出したまへ國も榮も世々に父の所有なればなり。アーメン。

問十四、是祈禱に縁りて我儕は何を求むるか。

答、我等は我等の父なる神の慈仁と聖を思ひ、又神我等の心情を玉座とし給ひて地上のこと凡べて楽しく幸福に行はるゝ時の至らむを祈願ひ、又我等の必要を充す程の糧を求め又我等他を赦す如く神に赦されむことを祈り誘惑の餘りに甚しからず凡べての殃禍に遭ひても安全に通過し得むことを希ふものなり。而して我等に榮光ある神の支配を永久に信頼するものなりとの意なり。

問十五、汝は何を信せよと教へられたるか。

答、我は宇宙を創造り宇宙を支持ふる天の父と、世に臨りしキリストの生涯に縁りて顯はされたる神の同情と、我等の中に宿りて常に我等を助け給ふ聖靈とを信せよと教へられたり。猶又永生、聖徒の交通、天國を信せよと教へられぬ。

註。神位に能力、慈愛、靈化の三面ありと曰ふは吾人の理解を助

くる思想なり。但だ神位中に實際三個の分岐ありと想ふべからず。通常「人位」と譯せられたる語は「面」と解せば一段明白なるべし。かく曰へばとて神位に牢乎、不可拔の人格あるを否定するものに非ず世の信經なるものに神の本性と神の居住とに就きて何事をか語らざるものなし。然るに神の居住にも亦三面あり。宇宙と地球と人の靈と是れなり。

能力、慈愛、靈化を神位の三面と曰ふも、宇宙、地球、人の靈を神の居住と曰ふも何れも同一の思想にして、靈的存在には萌芽と、社會と、歡喜との三要素ありとの意なり。是思想は少年には難解なるべし。されど「信仰の本質」に於けるが如き一段高等なる課程に於て是を教へなば大なる益あるべし。

問十六、「永生」とは如何なる意味か。

答、それは現在我等の中に在る神よりの生命の萌芽が我等の思想と行為とに縁りて生長し膨脹することなり。罪と怠慢とに縁りて餓えしめば此生命は殆んど枯死するに至らむ。されど信仰に縁る奮勵と神の恩寵とを以て養はば此生命は育ち溢りて無限愛と献身の徳をつくる。

註、是生命の糧と献身の徳との關係に就きては約翰傳第四章卅二節卅四節を引用せよ。

「永生」てふ語は時の永さを表すよりは時を超越する意多し。「生」の意強くして「永」の意弱し。曰く「我きたるは羊をして生を得かつ豊かならしめむがためなり」と。

永生を得れば常に進歩の止むを得ざるが如き境に入るにあらず。時として自家の失策によりて進歩發育を阻害して滯滞し蹉跌する

ことあるべし。故に永生には畏るべき責任附帯し是を遂行し得るは只だ神の恩寵に浴するにあるのみ。かゝる大なる救済を等閑にせば如何にして我等は免るゝこと得べき」

問十七、聖徒の交通とは如何なることなりや。

答、互に相助け相愛する存在者凡べての交情なり。其中我等の知れる者あり知らざる者あり。我等と共に在る者あり我等よりも前に世を去りし者あり。

註、未だ完全なる人とならず自己の過失あるを自覺し是を改善せむと努力しつゝある者も聖徒と稱へらるゝとあり。されば聖徒の交通は地上に行はるゝとあり。地上に行はれざることあり。友情及び精神は肉體の死する後も猶繼續す。而して兩界の橋梁を架するものは愛なり。死は存在の物質的要素の粗大なる状態より細微

なる境界に遷るべき自らなる轉歩なり、急ぐべからず恐るべからず。死後吾人は記憶と人格的意識とを愈々倍々擴大ならしむるを得べし。

問十八、天國とは如何なる意義なりや。

答、天國とは地上と其他とを問はず生活の完全なる状態を曰ふ。天國は我等の心の中に始まりて遠く廣く擴がり、常に愛と歡喜と平和とを齎らす。天國が最後の勝利を得る時キリストの再臨あり。我等の努力は稍是を早め得べし。熱心赤誠を以て努力するに足るものは只だ天國のことのみ。

註、人類の福祉、及び人類の住居たる地球の善事美事に關係することは何れも天國てふ觀念の中に含まる。天國は正常に解すれば普通に想像せらるゝよりも宏大にして雄渾なり。

問十九、三位一體の教義を如何に解くべきか。

答、一神の本性を人の思想に容易く入り得させむがために様々の方面より見たる語なり。人の心に最も強く映りたる相又は姿態は三なり曰く。

創造主、支配主、

祐助者、同情者、

慰籍者、聖化者、

是三者は通例父と子と聖霊と呼ばれ、神の三位又は特徴又は様相なり。

註、神位には秘義多し。而も三位一體の義中に何等算数上の矛盾若くは不可解の謎を含まず。只だ簡單平易なる表理をなさんと企てたる語のみ。基督教の信仰は人類が現在理解し得る以上の項目

を含むことあるべし。而も決して理性に反対なる事柄を信せよと強ゆるものに非ず。

問廿、汝の信仰の大略を述べよ。

答、我は惟一の無窮無限存在者、我等を導き我等を愛する父、萬物を創造り萬物を支持ふる主を信す。

我は神の本性の特に我等の主イエスキリストに縁りて人類に示されたることを信す。イエスキリストは千九百年前パレスタインに生れて教訓をなし苦楚を受け給ひてより後神の永久の子世の救主として基督教會に拜み崇められぬ。我は聖霊が善と真との真に常に我等を助け導き給ふことを信す。又祈禱は人と神の交通る方法なりと信す。又我等は専ら信仰によりて永生と聖徒の交通と神の平安とに入り得べきものなりと信す。

自我と宇宙

基督教の信條に關係ある哲學の初歩。

(信條として使用せらるゝ術語の説明又は教義字彙)

問廿一、内住とは如何なる意義か。

答、内住とは生命若くは支配力の遍滿を曰ふ。低き意味にては精神と物質との關係を言ひ顯はし。高き意味にては神の宇宙に於ける關係の一面を指示す。

註、人は曰ふ神は餘りに完備絶對なるが故に是種の關係若くは形容を以て言ひ顯はすを得ず。或意味に於ては眞に然り。洵に神は名なきものなり。萬物を抱合するものなるが故に何物にも抱合せられ得ざるものなり。されど神を是意に限るは言語の効力を概

奪するものなり。かく曰ふは一個の球を同時に凡べての方面より見むと欲するか若くは人の制限を超越せむと欲するが如し。

内住なる語を神性に適用するは甚だ有益なる思想なり。何となればそは神が宇宙を離れて高き玉座に鎮坐し外部より宇宙を支配すとの思想を排除すればなり。是くの如き遠離隔在せる神を描くときは人をして無神説を攝らしむるの危険あり。蓋し無神説は偽りの神觀に對する反抗に始まり習慣と我執とに助成せられて固定の主義となるものなればなり。

人の精神が肉體を動かし肉體を支配するや外部の力として外部よりするものに非ず。内部の活力として内部より全部に遍滿す。かくの如く神の本質は無限の宇宙全部に遍滿し宇宙を活かし宇宙を支配す。此比喻は不完全なりと雖も吾人を益すること尠からず。

人の精神は一時的有限的肉體機關に制約せられ限定せらると思ふべからざるが如く神の精神も亦宇宙と稱せらるゝ無量無窮の形體中に監禁せらるゝと想像すべからず。神の内住てふ教義は神の超越てふ教義を以て補足せざるべからず。

問廿二。超越とは何ぞ。

答、存在する物の一を他と比ぶるに二者密切に相關連し一は他を支配し利用しつゝ而も兩つながら他の高等なる物に隸屬するときは一は他に超越すと曰はる。かくて生命は物質に超越し有機體は其構成要素たる喰食細胞及び他の細胞に超越し精神は肉體に超越し神は自然及び人類に超越す。

問廿三。進化とは如何なる意味なりや

答、進化とは潜伏せる可能性の徐々に開展せらるることなり。物質

生命精神等の内部に伏在せる潜勢力の極度まで露呈せらるることなり。

註、進化を阻害抑遏するものは必ずしも外部より来る障礙即ち抵抗力には非ず。却つて多くは内部の反動即ち隋性なり。由來隋性は一時に無限の結果を生み出せざる力に對して必須的に附隨し來るものなり。(勿論かく曰へばとて悪人若くは自由意志ある者に敵意若くは悪意ある力の襲來するを否定するものには非ず)

斯くの如く進化過程は既に一個の秘義なるに猶そは時間てふ他の秘義と関連す。進化とは人の思想なり。されば時間に制約せらるる思想なり。

さはいへ吾人は完全なるものに停退若くは滯滞ありと考ふる能はず。されば時間的に考ふるときは神も亦進化若くは理想に向ひて

進む性質を有す。一事を完了すれば更らに新たな事を開始し永久に進歩の課程は繼續すべし。

問廿四 創造とは何ぞ

答、創造とは物理上並びに精神上の一切物の進化する間に神の靈の活動する不知課程なり。かく思へば宇宙全體は神の奇なり若くは流出顯現なり。人の精神は特別に神の精神に酷似し神と同様の活動力及び責任の萌芽を有す。

註、創造とは萬事を一時に完了することに非ず連續的の課程なり。創造と連續とは互に相關連す。是を例ふれば豫め企てたる目的に緣りて事件を實現し若くは進行せしむる課程に該當す。小規模に於ては美術家が其思想を具體化するは一種の創造なり。人類の經驗範圍内に於て神の創造の課程及び起源を例證するものなり(問八

の答を見よ。)

美術の傑作名品を充分に翫賞せむと欲する者は美術家の精神と合一せざるべからずとは吾人に取りて甚だ有益なる思想なり。吾人をして大膽なる語を用ひしめば創造主のキリスト的欲望が人類を創造し人類を庇護して現世の幸福と無盡蔵の未來とを與へ給へるは人類をして宇宙の美と榮光とを翫賞し得しめむがためなり。

問廿五、我等は罪惡問題を如何に考ふべきか。

答、機械的宇宙を構設するは容易なり。されど自由意志と自己意識とを有し外部より強迫せらるゝとなく創造主に反對し創造主と乖離し得る存在者の進化は必ずや長き奮闘的課程を閲せざるべからず。與へられたる心理條件の下に諸多の相背馳する意志が存在する限り現在の宇宙は最進歩せる又最満足なる宇宙なり。されば時として是

宇宙は凡べての可能世界の中最上なるものと稱せらる。吾人は是世界以上の世界が作られ得べかりしに實際に於て作られざりしなりと想ふべからず。又神は一段高等なる可能世界を實現することを廢し劣等なる世界を選び若くは默許したりと考ふべからず。我等は創造事業を以て容易の業なりと思ふを得ず。

註、理想高ければ高き程自己の不完全を識ること多し。さればこそ聖徒は特別に罪の自覺鋭きなれ。高き理想に進まむとて努力するは例へば高山に登るが如く壯快の感を伴へど常に勞苦と疲病とを覺えざること能はず。野蠻人若くは凡人に相應する程の志望を挟み低き水平面に於て生活することは比較的容易なりと雖もキリストに向ひて進むは難し。そは深甚なる聖き歡樂に充盈するものなりと雖も一面寂寞と悲哀とを味はざる能はず。

されば悲哀と苦痛とは必しも全然罪惡なるは非ず。そは往々一段高きものに登らむとする努力に伴ふものなり。そは生長の苦痛にも比すべきものならむ。過失も亦進歩階段の段階として缺くべからざることあり。蓋し苦悶と誘惑とは道德的存在者を教育するに必要な手段なり。別離の苦惱は愛なき者には起らず。然るに是くの如き無我の苦痛は世を變化し富贍ならしむる所以に外ならず。

問廿六。基督教徒の聖書に對する立場は如何、

答、聖書はインスピレーションを受けたる古文集にして初代の詩的想像に始まり人類に與へられたる最高最深の思想に至る神觀の發展を説明し、古代に於ける祭物若くは犠牲の原理の進化と神子受肉説及贖罪てふ基督教の根本教義の歴史的根據とを叙述しキリストの公

會と稱せらるる團體若くは同胞結社の建設を記載せるものなり。それキリストの公會は是等の傳説を保存し解釋し是を人類の利福に適し、聖靈の指導の下に更らに是を純ならしめて後代の人に傳ふべき義務を有す。

問廿七、人類の墮落とは如何なる意味か。

答、罪の本性は光明と知識とを得たる後過失に陥ることなり。善を見て惡を選ぶことなり。されば罪の降る以前に我等は完全なる自意識と善惡の識別力とを得たるものならざるべからず。其以前の行爲は如何に殘忍なりとも嚴密に曰はゞ罪には非ず。故に罪と自覺して罪を實行したる時代を墮落の時代と考へざるべからず。要するに墮落とは生存上向上の段階に於て進歩に伴ふ反面の惡しき結果なり。

問廿四、審判とは何ぞや。

答、審判とは創造の如き連続的自然的課程に従つて人々を自ら制定する境遇に引致することなり。献身努力奮勵琢磨するものは天國に入りて愈々倍々向上す。然るに私慾怠慢殘忍に緣りて高き天性を損傷するものは憐むべき境遇に陥り悔悟及び悲哀に緣らすんば是境遇を脱し得ざるべし。

最後の審判とは地上の生活の結末に於て作成せられたる性格をいふ。死後吾等は肉體の被衲を剝脱せられ裸かにして善惡何れかの靈的勢力に曝露せらるるが故に最後の審判は極めて由々敷事なり。されど是を以て進歩の可能性は停止せられたるもの若くは改善恢復の希望全然消滅せるものと思ふべからず。

註、審判は結局各自が人類の到達し得る最高點に如何程迄到達し

得ざりしかの程度に縁りて決定せらる。されば其は人の子キリストの審判と稱せらる。而して審判は個人にもあるが如く社會にもあり。現今の社會状態を見るに此標準に縁りて罰せられざるものは妙し。

吾人は社會状態を賊し是を濫滞せしむる習慣を審判し宣告する權利あり。是くの如き習慣の存在は吾人の耻辱なり。是を改善するは吾人の權能なり且つ吾人の榮譽なり。されど同胞個人の過失に關しては穩かに警むるを可とす。吾人はそれが如何なる程度外界境遇の結果なるかを知らざればなり。

問廿九、刑罰とは何ぞ。

答、刑罰とは我等の罪科より當然生じ來る結果の總和にして我等を訓練し我等を益する手段なり。

我等は心して刑罰の不自然なる解釋を避くべし。單に苦痛を與へむがための復讐的刑罰といふが如きものあるなし。若しありとせばそれは野蠻的にして何等の効果もなく又公正なる道にもあらず。

問三十、天國地獄とは何の意か。

答、我等の靈が其天分及び志望と完全なる調和にあるか又は全然乖離せるかの極端なる有様なり。

天國にあるものは如何なる衝動も自發的にして歡樂溢れ如何なる行為も善果を結ばざることなし。地獄にあるものは自ら内に相闘ぎ相戦ふ力あるを覺え活動は苦痛となり世に希望なるものなしと思はれ生存は一種の苛責なりと思はる。

心はさながらにして世界なり。心を出でずして地獄より天國を造り天國より地獄を造り得。

(ミルトン)

問卅一。人格とは何ぞ。

答。人格とは個々人々の性格をいふ。記憶意識、意志等は調和あり一貫せる全體を成す限り人格を作る要素なり。されば人格は過去現在未來に關係あるものなり、されど人格若くは個人性そのものは現世の一次的形體を支配し超越するものにしてその本性は何處に於ても恒久的なり時間に超越するものなり。

問卅二。死とは何ぞ。

答。死とは一次的單位若くは集合力の消散し若くは崩壊することなり。是單位若くは集合力は高等なる本體の諸部分を連結翕合しその散漫するを防ぎよく形體の中に是を發現するを得しむ。

註。生物にして最も單純なるものの中には殺さずでは死なざるもの

あり。是種の單一細胞は生長したる後分裂するも猶崩壊せずかくして種の永續を維持するものなり。されど複雑なる細胞の集合體にありては其分裂餘りに急激なるが故生命の力は是を統合するを得ずして其際個性は滅却せられたるが如く思はる。

問卅三。全滅とは何ぞ。

答。全滅若くは或物の無に歸することは吾輩の考へ得ざる過程なり何人もかゝる經驗を得る能はず。

註。「無なるものあり」と曰ふは疑はしきことなり。凡べて存在するものゝ一時的屬性は失はるゝことあるも根本的特性は恒久的に存在するものなり。

問卅四。永生とは何ぞ。

答。永生とは根本的實在的存在の永續を曰ふ。宇宙に現れ來れるも

のには皆永生あり。宇宙が一度執へたるものは永久に失ふ能はず。価値の不滅とは此ことなり。進化は實際価値の總和を増す。それは潜勢的価値を變じて現實的価値とならしむるものなり。

問卅五、「神的」とは何の意ぞ、

答、それは無上存在者に對する關係を曰ふ。尙ほ吾等に福祉を與へて人和の量り得ざる靈的存在者に對する關係をも曰ふ。

註、新たなるもの大なるもの神的なるもの何たるかを如何にして知るかと曰はゞそれはわれ等の中にある神性に縁るなり。即ち靈性中最も神に似たるものに縁るなり。

神につけるものとは我等の最高理想に關係し是れに反應を與へ是を高揚擧するものを曰ふ。

問卅六、恩寵とは何ぞ。

答。恩寵とは神の愛憐補助にして困憊める人類が權能の限り是を享くる準備をなしたるときに與へらるるものなり。その與へらるゝや人の思に優り、人の功績に勝りて渥かに與へらるゝものなり。

註、神は常に神の意志の表現たる固定法則を手段若くは動因として活動し給ふ。されば是法則を無視するものは必ずや悲酸なる運命に陥らむ。而して多くの場合に於て手段を發見するためには知性を要し手段を適用するためには力を要す。自然界の眞理を研究するに迂なる國民は神の補助を受くるの価値なく又實際是を享くると稀なるべし。かの「ハーキリースと御者」の古譚には深長なる意義あり。是古譚は通例のインツプ物語には掲載せられずとか。余が記憶を辿れば次の如し。「牛車惡しき路を通りけるに一の輪車轍に拵りて牛は動き得ざるに至りぬ。御者は直ちに跪きハーキユ

リースに幫助を求めぬ。ハアキリースは雪の上より答へて曰はく「人よ、汝の肩を輪の下に入れよ。然る後われに幫助を求めよ」と。恩寵の與へらるゝや渠水の是れを享くるために拓かれたる深溝に突入するが如し。是世は慈愛の満てる世なり。我等は己が望む以上己が功績以上に恩寵を常に與へらるゝものなり。地上の美も人は墜落せしむるにあらずんば我等の應接に違あらざる程我等の耳目を聳動せしむる程にさわなり。我等の活動にして恩寵を受くるときは必ずや滋き果を結ばむ。

問卅七、聖奠とは何ぞ。

答、聖奠とは物質の手段を藉り肉體の感覺に訴へて神聖なる奥義を悟らしむる方法なり。是は靈的實在の物質的方面を彰すものなれば人に於ける靈肉の合一に對應す。

註、一般に聖奠と曰はゞ精神と物質とが相關係する凡べての範圍を含み、意味極めて寛濶なり。禮義の行爲及び愛の記號等は此性質を帶ぶ。されば吾人にして是を濫用せず正用せば内なる感情を物質に緣りて助成するを得べし。

同卅八、基督教の聖奠の主たるものは何ぞ。

答、世に公認せられたる基督教の聖奠は聖洗式及び聖餐式なり。聖洗式に於ては水を以て神の恩寵を歡受し淨潔と再生とを得る記號となす。聖餐式に於てはパンと葡萄酒とを用ひて人の靈が神の靈と同化すること恰も食物が肉體に同化せらるゝが如く人の靈が神の靈に養はるゝこと肉が糧によつて強めらるゝが如き奥義を彰はす。

註、殆んど凡べての基督教會は聖洗式を入門式とし、聖餐式を會員たる資格の繼續する記號及び條件となす。殊に聖餐式を以て團

體宗教の活元たる秘義と思惟す。聖餐の形式は古代猶太に於ける
 逾越祭の宗教的儀式を踏襲したるものなり。蓋し基督教は古代の
 習慣を廢せむがために來らず是を完了せむがために來れるなり。
 されど燔祭を捧げ血を流すが如き祭司の犠牲が家庭的にして平和
 なる晚餐に代るに至りてそは主のカルバリー山上に於て自己を犠
 牲とし給へる尊き意味を附帶し來れり。

問卅九、奇蹟とは何ぞ。

答、靈界の消息を領會せしめむがために人の驚異を惹き起す異常の
 事變を奇蹟といふ。奇蹟は物質を藉る點に於て比喻と聖莫とに似た
 りされど一段意味深し。而して奇蹟が驚異事なりと思ふは人の智識
 の不足に緣りてしか思はるゝのみ、智識の進歩に従つて除外例なり
 と思はるゝことは漸次消滅し去らむ。實に如何なる平凡の事柄も充

分に究盡すれば吾等の驚倒に値せざるものはなし。されど世上の事
 變にして不自然なるものはなし。不自然とは自然を病的なる人の思
 想に解釋したる名のみ。眞に不自然と稱すべきものあらばそは渾沌
 の状態なり。支配主あり秩序ある世界の出來事にはあらず。吾等の
 自然に對する智識の増進するに従ひて會ては法則の破棄と目せられ
 たるものも法則及び秩序の好適例となること多し。神の活動は現世
 地球に於て偶然稀れに認めらるるものに非ず。隨時隨處に於て發見
 せらるべきものなり。さはいへ所謂異常なる事變と天啓との契合す
 るは争ひ難きことなり。

註。異常なる靈力は物質に對して異常なる支配力を有すること多
 し。されば奇蹟行爲を記載せる古文書は必ずしも不可能事を録せ
 るもの又は人を瞞する虚構談なりとして彈阿し去るべきに非ず。

却りて該博多識なる批評家の吟味によりてそが有益なる教訓を表彰するものなりと證明せられなば吾人は彼等を信頼し其證明を受け納れて可なり。

問四十、靈とは何ぞ。

答、靈とは吾等に意識せられずして吾等を支配し指導する原理なり。そは吾人の個性を造り又生理的條件と遺傳との制限を受けつゝ肉體の形状を作るものなり。時として靈なる語は意識と意志をも含むことあり。されど其際には「心」と曰ふを妥なりとす。廣義に於て靈とは我等の經驗一切の倉庫なり。肉體は靈の器又は機關にして靈を物理世界に活動せしめ物質と力とに反應を興へ又物質と力より反應を受くるものなり。

註、肉體の破損は靈の發現力を阻害す。されど眞に靈を賊するものは悪しき思なり。

問四十一、我等は神子受肉を如何に思ふべきか。

答、神子受肉とは神の中にある人性を地上に現したることなり。イムマヌエル(我儕と俱なる神)の天啓なり。キリスト魂のナザレのイエスに於ける受肉化身は人の靈と肉體との神秘なる結合と同理なり。

註。普通神子受肉説を説明するには散逸し易き思想を物質裡に具體化する過程を以てす。例せば美術家の思想を繪具若くは石材を以て表現し詩人の幻を言語の中に詮表する場合の如し。殊に物質的機關の形體中に生命及び精神を宿らしむる物理的作用と精神的作用の關係を以て説明する者多けれど是は難解なり。抑人は何れも大我の一部受肉せるものなり。其物質的方面は小兒より徐々に發育して或年齢に達すれば成熟の最大限に達し老耄期に到れば道

例萎靡して遂に崩壊す。瘡痍若くは疾病により是種の常規は抑塞せらるゝか又は阻害せられて殃禍を醸すことあるべし。さればキリストの受肉は異常の権能に縁れる驚異事なれど猶一般の課程に屬すべきものなり。一般の過程によりて完全なる人性を圓現したるものなり。

問四十二、贖罪とは何ぞ。

答、贖罪とは聖の美を見て是に生擒せられ自己の不完全を自覺して悶絶し遂に宇宙恢復の大事業に連りて神の目的に應化し神と合一して罪の桎梏を毀つことなり。神と調和し合一せりとの自覺は救世主の生と死とに表れしが如き献身的勤行と博愛同情に縁らすんば得べからず。神の恩寵を受くる程のものは常に是を受くる準備と努力とによりて神に近かざるべからず。

註、迷悟錯誤の中に彷徨する人々に對し熾盛なる同情を懷くものは勢代償的苦痛を味はざるべからず。代償的苦痛は是れに感銘し應答する人に對して贖罪的の効果を與へ彼を再生せしむ。是は祭司の犠牲に縁りて古代より表彰せられたることなるに曲解者は刑罰の代償といふ教義を唱へ犠牲とは無罪なる贄を屠りて神の憤怒を寬むるものなりと説けり。されどキリストの自己犠牲は是くの如き謬見を排擠したるものなり。決して神は代償的犠牲を要請し刑罰によりて和解を求むるものに非ず却つて神親ら人の自由なる精神を激勵し調停し神自ら人の罪を贖ふために苦み給ふを示せるなり。

問四十三、再生とは何ぞ。

答、再生若くは新生とは靈の覺醒に縁りて再び神の感化力に連るこ

となり。再生せる人は神の力を内に領けて聖き進歩的生活を送り滋
き果を結び得るに至らん。

註、其新生と稱せらるゝ所以は靈の覺醒に緣り理性に本來附着せ
る特長を眞に發揚し得るに至るが故なり。靈の覺醒は官能を激勵
し趣味を高揚し向上心を燃犀ならしむるが故に宇宙は茲に新裝を
呈し來り人は自ら新天地に再生せりと感ずるに至る。

問四十四、回心とは何ぞ。

答、回心若くは基督の和解若くは贖罪若くは救済とは道德の價値を
新たに認識し、私慾我執を忌むべきものと悟り神の榮光を明かに認
むることなり。外部に於ては何の變化もなく外界は何の増進もなけ
れど是の經驗ありし後は世界に新たな意義を發見し宇宙は一變せ
るが如く思はれ自己も亦別物と化し小兒の如くして天國に入れりと

感ず。

問四十五、肉體の更生とは如何なる意味か。

答、肉體の更生を合理的に解釋すれば來世に於て内なる不死の靈を、
擁護する何物かの繼續を曰ふ。其物の何たるかに關せずが内なる
精神に奉仕することは恰も現世に於ける肉體の現在の精神に於ける
が如くなるべし。人格にして完全なる存在をなさんためには常に形
體と精神との二重の様相を須要となす。故に未來の存在が完全にし
て亡靈の如き存在にあらざる以上は現世に於ける精神と肉體との如
き二重の様相を伴はざるべからず。

註。人は地下に埋葬せられて墓中より更生するものとは世界に廣
く信せられたる思想なり。されど人の人格が死骸の中に殘留すと
いふは誤れり。是の如き迷信と無知とに陥らざる様警戒すべし。

されば更生なる語は可成用ふることを避くべし。古文書中に此語を發見するときは説明するを要す。

問四十六、キリストの更生に就き基督教徒は何を信するか。

答、イエス殺され給へる後キリスト魂は多くの人に顯はれ或時はイエスの肉體を再攝し現世の形體を衣とせるが如き有様にて現れ給へり。其後昇天せりとは不朽の榮光ある世界に歸り給へることを表彰す。

註、此信仰の中にて最も須要なる因素は我等の主我等の帥が恒久に不斷に活動し給ふることなり。是件に關しては些の疑あるべからず。

其他肉體の崩壞及び復成若くは機械的過程の細目に關しては吾人の知識の擴大する日までは何の定言をも試みざるを可とす。亡靈

は恐らく主觀的のものならめどそは不知經驗界に屬するものには非ず。但だ今の處是れに關する學理の不完全なるのみ。亡靈が人體に宿るといふが如き例外の事變も決して不合理なることには非ず。變容貌の如きことは決して有り得ざることには非ず。

問四十七、時とは何ぞ。

答、時は不斷に且規則的に現在を過去に變更するものなり。存在とは永久の「今」なり。現在とは意識の生起しつゝある領土なり。過去と未來との間に於ける過渡の刹那なり。現在は行爲をなすべき機會なり。唯一機會なり。そは活動一切の行はるゝ範圍なり。過去とは記憶の行はるゝ領土なり。恢復すべからず變更すべからず。されば過去は爲し了れる事項の蓄積なり。判断の倉庫なり。未來とは希望向上心、意志、慾求の向ふ領土なり。未來は現在を指導し且

つ督勵す。

註、吾人が時てふ觀念を拾得するは吾人の知覺により空間中の運動の速度を直接に經驗し是を抽象するに縁る。されば時を測定するには全く是方法を用ふ。

問四十八、永遠とは何ぞ。

答、永遠とは過去現在未來を抱合し、存在者の時間の全野を總攬す。是れ無始なり無終なり。而して實在者の生命なり。

註、吾人は今も永遠の中にあるなり。又未來に於て「今」てふ感が消失するならむと想ふべからず。吾人が行爲をなす機會は目前にもあるが如く未來にもあり。されば未來に於ても「今」てふ感はあり、

問四十九、先見とは何の意ぞ。

答、時間内に起る事變は是を一切を抱合する永遠の立場より見れば

他の様相を著け來るべし。永遠の立場より事變を見るは是れ先見の力なり。かくて先見なるものは神に相應しき力なれど人にも是力なきに非ず。かゝる人は無限なる神の精神に連りたるものと曰はざるべからず。

註、通例先見は事實を精確に且汎く知り是を支配する法則と其大かたの常軌及び特徴を領會せるもののみ得らるべき力なり。世に存する原因てふ原因を悉く商量し干涉する力を一として看過することなきとき其の先見は信頼に値す。されど時間の制限を超越し時間を支配して先見の力を得る場合あり。是方法は一段高等なるもの、人力の能くする所に非ざるが如く思はるれど實際不可能にはあらず。

世に責任に對する意識と意志とが存在する以上は世界に未萌の活

問題の存するを許さざるべからず。随て神の計畫中若くは宇宙の意匠中に自發性と稱すべきものゝ存在するを許さざるべからず。蓋し生命及び精神中に發見せらるゝ責任てふ意識及び意志は絶對的強制力に動かさるゝことなく神の有するが如き自己決定の力あるを預定す。随て嚴密に預見せられざりし新事件新現象を露呈し來ることあるべし。

吾人は法則に服従せざるべからず。されど必ずしも一切の法則に服従する要なし。例せば機械的法則の如し。而して神が吾人の行動を預定するは吾人の性格に縁るものにして必ずしも吾人の行動を不自然に若しくは獨斷的に強請若くは規定するものに非ず。吾人は神に指導せられ幫助せらるゝも必ずしも強請せらるゝものに非ず。

問五十、自由意志とは何ぞ。

答、意志は人をして注意力を支配せしめ意識的行動を決定せしむる官能なり。彼れを動かす動機は元より一様にあらず。或は自己の性格と高等なる本我とによるものあり。又遠境の状態及び他の暗示によるものあり。

自由意志あるに縁り人は主もに自己性格の力に支配せらるゝを得べく自動機械の如く單に外部の衝動に支配せられざるを得。況んや自ら忌憚し其魔力を排除せむと望む衝動に支配せらるゝをや。若しかくの如くば彼の意志は奴隸となり其本性に於て自由ならざるものなり。

註、自由意志は無法則又は不合理の發作的作用には非ず。嚴密に曰へば無法則てふことは不可能なり。如何なる物も動力なくして

動くものなく、如何なる事變も原因なくして生起することなし。動機なき行動は發狂の兆候と見るべく決して自由意志の結果と考ふべからず。

高等動物に於て吾人は意志あるを見る。否な或程度迄性格あるを知る。されど其選擇作用は只だ萌芽的なるのみ。人類にありては自己の追隨せむとする動機を許多の外部的動機中より意識的に撰拔し他を排擠し得るなり。故に宇宙の要求に應じて其主腦を握り偶然的末瑣事を捨て、顧みざるを得べく必ずしも初めに來れる刺戟に追隨せざるなり。

意志及び性格は如何なる種類のものに不斷注意を拂ふかによりて大なる變化を生ず。然るに注意作用は吾人の支配を受くること多し。隨て吾人は高き動機を助長し低き動機を壓塞する力あり選擇

の機會生ずる毎に吾人の意志は正しき方を選び得るに至らむ。

ワイルドフルチス「我意」なる語は通例柔和の反對語として用ひらる。然るに「意地張り」

又は「頑固」なる語も亦同様の意に用ひらる。されど不充分なる理由の上に立ちて自己の判断を膠守する態度は「執拗」なる語を以て表すを妥とす。

されど戰場に於て危機間髪を容れざるが如き場合には自己の主張を株守して他の容喙を許さざるを佳とすることあり。又或場合には火急の判断をなして而も直観又は靈感を一握し得る天才者流あり。只だ一般には執拗なる氣質は判断力調和を失し濶大なる思慮なく瞽盲我執の結果なること多し。元より是種の性格の人を薰育教化せば剛健なる人格を造り得べし。

問五十一、預定とは何ぞ。

答、預定とは特別の目的を遂げむがための措置又は聖別作用なり。即ち一の目的を實現せむがために妥當なる材料と有意的な人格とを先見によりて選擇することなり。

預定とは權威を專斷的に運用することにあらず又志望欲望を遏塞することにもあらず。是等を見先して利用するのみ、強制するには非ず。

註、吾人の運命を全然他の意志(神の意志)によりて劃定するは預定にはあらず。さりながら廣義に曰はゞ預め畫策せられたる意匠を實現せむがために適當なる手段を活用して自己を是に献身するの意に用ひらるべし。預定なる語は必ずしも全然神の作爲に專用せらるべきものに非ず「選び」なる語は多くの不用なる議論を醸しぬ。されど最も單純なる定義は一米人の與へたるものなるべし。曰く

「選ばれたるものとは欲するものゝことなり。選ばれざるものとは欲せざるものゝことなり。」

問五十二。存在とは何ぞ。

答、存在とは絶對者が自ら定めたる時間空間の制約裡に自己を實現し自己を表現することなり。

註、是は元より存在の人的概念のみ。されど吾人は人的概念を超越する能はず。吾人の見得る限りの存在は何等かの制限を受けざるなし。例せば樹木は空間中の限られたる境界中に存在す。一の樹木は是場所にあると同時に他の場所にあるを得ず。又或る時期に於けるよりも次の時期に於ける樹木は一層發育せるか若くは一層枯槁せるものなり。されば一の樹木なる觀念は其一瞬時に於ける樹木よりも内包廣く春夏秋冬發生より凋落に至る迄の凡べての

階段に至る變化を含むものなり。

字義抄註

運動 とは最初筋肉の感覺より得られたる直接知覺なり。

空間 とは自由なる若しくは無抵抗なる運動によりて得られたる抽象觀念なり。

力 とは筋肉の運動が抵抗を受けたるとき直接知覺なり。

物質 とは觸れ得べき感じ得べき存在界の一部にして直接若しくは間接に吾人の感官殊に力の感官を刺戟す。物質とは元來力の感官に於ける經驗より抽象せる觀念に外ならず。

エネルギー とは物質的宇宙に於ける活動力の倉庫なり。物質的活動力の形式はすべてエネルギーの推移若しくは變化を伴ふ。(若しくはエネルギーを原因とすされどエネルギーの總和は常に不變なり。)

生命とは複雑なる分子の有機體に伴ふ作用なり。生命は物質及びエネルギーに直接交渉する指導的排列的原理にして物質及びエネルギーを特定形式中に編成し是をして特有の結果を生せしむ。生命が發達進化するときは物質界の基本的因素を意志並びに意識の力に隷屬せしむる力あり。

意識の最下級なるものは原始的感覺情慾慾望の總括なり合計なり。それは疼痛及び飢渴の如き慾望に對する感性も含む。進むでは色、音、香、温、壓、味、等に對する感性、更らに進むでは識別力及び本能的若くは初步の推定作用をも藏し、少量の記憶と愛憎の萌芽をも加ふることあり。

自意識とは自我と自我とは別異なる外界と是二者の關係を認識することなり。

感覺とは肉體の感官機關及び神經組織に緣りて精神上に與へられたる印象なり。

智覺とは一の感覺と他の感覺とを比較し外界の事物の語を藉りて感覺を解釋することにして感覺到精神的作用の加はりたるものなり。

睿智インテリジェンスとは感情及び智覺を思想及び觀念に翻案する精神活動のことなり。

觀念とは過去の經驗を綜合分解して形成せられたる精神上的の產物なり。觀念を得るには直觀とインスピレーションとを要すれど現在の感覺とは無關係なり。

情緒とは精神並びに肉體の緊張せる状態にして感情と觀念との結合せる結果なり。情緒は通例有意的行爲を發生する特別の動機となる。動機とは意志を左右する感化力なり。事實と思想のみにては活動を

起さず。されど是二者を性格に縁りて解釋し淘汰するとき感情若くは情緒となり強き動力となる。

意志 とは注意作用若くは精神的活動力を意識的に支配指導して以て行爲若くは肉體の活動力を規定する作用なり。

性格 若くは氣質性癖の鑄形とは習慣と意向の修練とによりて造られたる永續的鑲刻にして個人の活動力を規定し軌一せしむるものやがて其運命を決定する一因素たり。

靈 とは凡べての思想の對象を動かし萬物に滲透する神性の一部なり

明治四十四年九月七日印刷
明治四十四年九月十日發行

譯者 矢倉保

發行者 東京市神田區小川町一番地
イ、ライ、イ、ア、ソ、ン

印刷者 東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
佐藤保太郎

印刷所 東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
中屋商店活版部

發行所 東京市神田區小川町一番地
普光社

販賣所 神戸市中山手通り三丁目外五
日本聖公會出版社

大阪市西區京町堀三丁目
榮光社

普光社出版書目

(三)

神學に關するもの

(1)

文學士共倉 保譯

神と人の人格論

菊版クローヌ 貳百五十頁

定價 上製金八拾錢 並製金六拾五錢 郵税金八錢

Hillingworth.—Personality, Human and Divine.

Translated by T. Shishikura, M.A.

人類の人格が靈物であるといふのは人類自身の主張である。物理學はこれを輕むするも、批判哲學は明かに之を論斷した。而してかゝる最高の範疇の下に吾輩は神を噴り得るのである。進歩的天啓を期待せしむるのである。此天啓の蹤を辿りて、神子受肉の最高潮に就き及ぼしたるものは此書である。
第一章 人の人格に就きての概念の發達 第二章 人の人格に就きての概念の解剖 第三章 神の人格に就きての概念の發達 第四章 神の人格に就きての概念の解剖 第五章 人格の領會に必要な道德的連帶の解剖 第六章 基督前に於ける宗教 第七章 基督前の歴史 第八章 神と人の人格を具へたる耶穌基督

文學士共倉 保譯

神の内住

菊版クローヌ 定價 上製金七拾五錢 並製金六拾錢 郵税金八錢

Hillingworth.—Divine Immanence.

Translated by T. Shishikura, M.A.

こはイェンケウオーネ博士が前者人格論に於て人格の方面より研究したる問題を物質の方面より論究し、史的事實以外より歩を進め自然宗教發展の徑路を辿り、自然宗教發展の頂に神子受肉説あり、神子受肉説の以前に自然宗教ある事を確言し、近代思潮に親み自然宗教的傾向を帯ぶる人に向つて、自然宗教の完成は基督教の信條にある事を示さんせしむるなり。
第一章 物質と精神 第二章 物質界の宗教的感化力 第三章 自然界に於ける神の内住 第四章 人に於ける神の内住 第五章 神子化身説と奇蹟 第六章 神子化身説と聖莫 第七章 神子化身説と三位一體説

文學士共倉 保譯

理性と天啓

菊版クローヌ二百八十頁 定價 上製金八十五錢 並製金七十錢 郵税金八錢

Hillingworth.—Reason and Revelation.

Translated by T. Shishikura.

基督教は宗教を骨子として、哲學を補佐とするものなり。さればこれを研究せんとせば其の宗教的方面を見、併せてその人生の實踐に對する關係と其思想とを考へざるべからず。本書は英國神學界の泰斗イェンケウオーネ博士が五大著書中の第三にして、基督教證據論の豫定たる哲學的及び道德的考査を陳べ、進んで此豫定の豫定に及ぼす智情意の影響に論及せるもの、譯者は廣同博士の著を譯して知られたる學士、此書に於て其筆愈精練の域に入れり。吾社は此一書を現代の讀書界に提供する事を名譽とするものなり。

第一章 基督教は合理なりとの歴史的主張 第二章 カント及びカント學徒の理性批判 第三章 抽象的認識と具象的認識の別 第四章 理性の制約 第五章 豫定觀念の基督教證據論に及ぼす影響 第六章 基督教と哲學との關係 第七章 基督教證據論に對する師父等の立場 第八章 基督教證據論に對する近代の立場 第九章 豫定觀念の成生に及ぼす性格の影響 第十章 基督教は人格の全部に訴ふる宗教なり 第十一章 信仰の合理性 第十二章 罪惡問題に關する基督教の立場 第十三章 結論

長老 小林神學士譯

基督教徒の品性

四六版總クローヌ 定價金 參拾錢 郵税金 四錢

Hillingworth.—Christian Character.

Translated by Rev. J. H. Kobayashi.

品性を説くは近代の一流行なり、儒教的品性を説くものあり、武士道的品性を説くものあり。されど乞ふ説く事を休めよ。吾輩が千九百年來傳へ來りし一種の品性あり。然らば其の品性は如何なる品性ぞ、これ此書の現はれたる所以なり。著者は英國一流の思想家なり、譯者は敬虔なる教育家なり。未だ其如何たるものなるや知らざる人は就て之を研めよ、既に知れる人はとつて以て反省の料とせよ。

第一章 基督教會理の目的は生命である 第二章 品性は生命の條件 第三章 鍛練は發達の方法 第四章 信仰と希望 第五章 愛 第六章 本徳 第七章 祈禱 第八章 サクラメント(聖莫) 第九章 神祕 第十章 基督教徒の生命は超自然である

長老 稻垣 陽一 耶 譯

三位一体の教義

菊版 貳百四十頁
定價 上製金八十錢
並製金六十錢
郵税金 八錢

Illingworth.—The Doctrine of the Trinity.

Translated by Rev. Y. Inagaki.

三位一体の教義は教理史上曾て屢論争點たりしが如く
今後亦然らんとするの徴候あり。著者此に見る所ありて
新に辨證的方面より此教義の根據其智的關係具實功力
を詳論せしものは即ち此の書に「わわれら」が「新編」の
二字を冠せしも亦此故也。昔に之れ神學校必供の參考書
たるのみならず荷も神學思想に興味あるもの、是非と
も一讀を要すべきものなり。我社は茲に牛津第一流の神
學者の名著を経験ある譯筆によりて日本の神學界に提
供するの光榮を有す。

第一章 進化は神を前定す 第二章 批評に於ける主
觀的分子 第三章 新約書に於ける三位一体 第四章
教會師父の間に於ける三位一体 第五章 新約書に
於ける教義的發達 第六章 教會師父の間に於ける教
義の發達 第七章 萬事は奧義に終る 第八章 此教
義の實功力 第九章 其價值は其眞理を假定す 第十
章 此教義の智識的關係 第十一章 創造行の繼續と
しての默示 第十二章 總括と結論

稻垣 陽一 耶 譯

新神學と舊宗教

菊版 總クローズ百五十頁
定價 金六拾五錢
郵税金 八錢

Gore.—The New Theology and the Old Religion.

Translated by Rev. Y. Inagaki.

カムベールの新神學なる運動は實に久しく伏在せる思
湖の或傾向を捕へて論壇に提供せるものなり。之に對す
る原來の基督教は如何なる位置にあるべきや。此時に
當リニア監督は其教區の大聖堂に於て此問題を説けり、
其講演の出版せらるゝや、チャーチ、タイムスは「われ
らの正さに聽かんとする所を最も聽かんを欲する人よ
り聽けり」といへり。極東にありても亦等しく多くの人
の聽かんとする所にして而も譯筆亦之に稱ふ。實に我
社はチャーチタイムス記者の言を繰返すと共に、此點
を聲言せんと欲す。

第一講 新神學 第二講 舊宗教 第三講 神の内住
第四講 罪の觀念 第五講 キリストの神性の意義
第六講 奇跡論 第七講 贖罪と聖書のインスピレ
ション 第八講 新神學と聖公會

825
141

1325
141

